

# 高校生の話すことの意識と実態

## もくじ

- 一、はじめに
- 二、話すことに関する意識
  - 1、調査の方法
  - 2、調査の結果と考察
  - 3、まとめ
- 三、話すことの実態
  - 1、研究の方法
  - 2、文字化の資料と考察
    - a、一発言の構成について
    - b、頻出語について
    - c、ことばのくりかえしについて
  - 3、まとめ
- 四、おわりに

## 言語教育ゼミナール

### 一、はじめに

これは私たち昭和四十年年度の言語教育ゼミナールの一年間の成果をまとめたものである。

ことばの教育にたずさわろうとする私たちが、国語教育の現実の姿を把握して、これからのあり方を自分たちなりに考えていきたいと願って研究にとりかかった。高等学校における言語教育では、表現力をいかに高めるかが大きな課題であろう。そこで、話す・聞く・読む・書くの四領域のうち、話すことに研究の焦点をあてた。

高校生が話すことに関してどのような意識を持っているか、ということを、彼らの言語環境、言語体験にもとづいて把握するとともに、彼らが、その話し聞く生活の中で、どれほどの表現力を持っているか、彼らの話すことの中では、どのような問題点があるか、を明らかにしようとした。

話すことの意識と実態が明らかになれば、おのずから言語教育の方向も私たちの前に展開することと思う。

二、話すことに関する意識

1、調査の方法

a、方法と内容

質問紙を作って調査した。ほとんど選択法であるが、より深く問いたい箇所は自由記述とした。内容は、話すときの意識、話す場、話しことばにおける文法観、方言観、などである。

b、対象と期日

広島市内の公立高校五校（普通高校）の二年生——一校一クラス——

男子一六二名、女子一〇七名、計二六九名、期日は昭和四十四年七月十七日と二十一日の中の一日、所要時間二十分

2、調査の結果と考察

(1) 友だちどうして話すことは

項	目	男	女	計
イ	非常に好きである	20.9	27.1	23.4
ロ	好きである	32.0	22.7	27.7
ハ	あまり好きでない	10.5	6.8	8.2
ニ	嫌いである	1.1	0	0.7

・男女ともに友だちどうして話すのは好きだということがわかる  
(2) (1)でハニの人に) 嫌いになったのは

項	目	男	女	計

嫌いになった理由は

項	目	男	女	計
a	小学校	21.1	0	16.7
b	中学校	62.6	0	45.8
c	高等学校	5.2	0	3.3

無効 1人 (人数)

無効 4.2%

・話すのが嫌いな否定的な態度がでてくるのは、中学校、高等学校において顕著である。理由としては、男女少しずつれがあるが、いずれも自我意識が生じる時期と平行してこのような態度が出てくるのではなからうか。  
(3) 友だちどうして話すとき何か心がけていますか。

項	目	男	女	計
a	話してもむだである	4	0	4
b	失敗があつて笑われた	0	1	1
c	人の心を傷つけたことがある	0	2	2
d	まじめに聞いてくれない	1	0	1
e	友だちがいない	2	0	2
f	自分のことば使いや発音が友だちとちがう	1	1	2
g	話すこととの障害(どもりなど)があるため	3	0	3
h	ひとりになりたい	7	1	8

無効 (%) 3.1%

「はい」に答えた人はどんなことを心がけていますか。(二つ以内で選択)

項	目		計
	男	女	
a	25.4	28.7	25.9
b	32.3	38.9	37.3
c	14.0	17.3	15.8
d	14.9	13.3	14.3
e	21.1	16.0	19.0

(%)

・友だちどうして話すとき、何か心がけようとする傾向は見られるが、何も心がけていない生徒が25・7%いることは、見のがすことができないと思われる。

・理由ゆりが多いことは、コミュニケーション意識よりも、相手意識のほうが強力ということを示しているとみられる。つまり友だちどうして話すときには、相手の感情を大切にしようとする傾向が強いのである。

(4)人前で話すとき、何か心がけていますか。

項	目		計
	男	女	
イ	58.6	62.0	60.2
ロ	32.0	29.0	30.9

(%)

無効 8.9%

「はい」と答えた人に、どのようなことを心がけているのか

自由に記述してもらった。(自由記述の結果は、コミュニケーション意識のあるものと、相手意識のあるものとに分類した。)

コミュニケーション意識のあるもの

相手にわかりやすいように	85
ゆっくりと落ちついて話す	14
はっきりと話す(発音、語尾、内容、主述関係)	13
ことば使いに気をつける	9
要領よくはなす	7
あらかじめまとめておく	4
短く要点だけ話す	4
自分の感情に支配されず落ちついて話す	4
内容を理解してもらえように話す	3
話の筋道をたてて話す	3
相手によって話題、話し方を変える	3
共通語で話す	2
途中で話が挫折しないように	2
話しぶり、態度に気をつける	2
具体的に話す	2
相手を自分にひきつける	2

(男女共) (人)

その場に適切な発言をする

(計一六一人)

相手意識のあるもの

相手の気持ちを害さないように話す	27
ていねいなことは、敬語を使う	8
相手の気持ちを考えて話す	5
楽しくユーモアがあるように話す	3
反対意見の言い方に気をつけて話す	2
礼儀正しく話す	2
雰囲気をつくって話す	1
まじめに話す	1
悪く思われないように話す	1

(計五〇人)

(男女共) (人)

(その他……言いたいことを言う 1人)

この分類結果から、人前で話すときにはコミュニケーション意識が強いことがわかる。(3)と合わせて考えると、友だちどうしで話すときは互いの感情を大切にしようとする意識があり、人前では相手にわかってもらおうとする意識があつて、基本的な態度が養われていることがうかがえる。

(5) イ 生徒会など大ぜいの前で

項	目	男	女	計
a	よく発言する	1.2	0	0.7
b	時々発言する	10.2	2.8	7.4
c	発言したいと思うができない	130.1	29.9	160.0
d	発言したいとは思わない	49.1	57.0	106.1
e	発言するチャンスが与えられない	9.2	7.5	16.7
		無効		0.8%

(5) ロ クラスの中で

項	目	男	女	計
a	よく発言する	5.5	1.9	4.1
b	時々発言する	239.5	31.8	271.3
c	発言したいと思うができない	14.2	21.8	36.0
d	発言したいとは思わない	32.7	26.2	58.9
e	発言するチャンスが与えられない	2.5	2.6	5.1
		無効		5.6%

イでは発言しない生徒(c・d)が82.5%もあり、ほとんどの生徒が生徒会などの大ぜいの前では発言しないことがわかる。ロではbが多くなってくる。これは話題が身近なものとなり、構成メンバーも少なくなり、互いに知っているものどうしの集まりになるためであろう。しかしc・d合わせて半数ほどになり、クラスにおいても発言しない生徒はかなり多いことはみのがせないと思う。

イロの結果から考えると、  
 ↓ 公的な場 ↑ 私的な場  
 の場が移るとき、意識の面で移行が見られる。どのように移行しているのかを見るために次の表を作って考えてみた。

	□のa	□のb	□のc	□のd	□のe
イのa	2	0	0	0	0
イのb	3	14	0	2	1
イのc	2	40	32	5	2
イのd	2	43	24	69	1
イのe	2	11	2	3	3

(人数)

イ→ロの移行の場合、積極的な人が消極的、否定的になるのはほとんどない。そしてbがaに、cがbへと移行していくのがわかる。しかしどちらの場においてもdという否定的な態度の人が69人もいることは注意すべきであろう。

(6)人前で話す前に

項	目	人数	(%)
イ	恐れ、不安、緊張を感じる	56.2	0.7%
	恐れ、不安、緊張をあまり感じない	43.8	
	計	100.0	
ロ	無効	0.7	0.7%
	無効	0.7	
	計	1.4	

イと答えた人の理由

項	目	人数	(%)
a	話す内容に自信がもてない	12.1	14.7%
	計	14.7	
	男	10.1	
女	計	14.7	14.7%
	男	12.1	
	女	10.1	

項	目	人数	(%)
b	人前で話した経験がない	12.1	13.5%
	自分が話すときの欠点に気づいていないから	15.2	
	計	27.3	
c	自分がかたがたから	12.1	13.5%
	計	15.2	
	男	11.5	
d	はすかしいから	17.1	18.5%
	計	17.1	
	男	13.5	

イと答えた人はいつごろからそうなったのか。

項	目	人数	(%)
(3) 高等学校	男	28.6	16.4%
	女	32.4	
	計	61.0	
(2) 中学校	男	38.5	16.4%
	女	39.2	
	計	77.7	
(1) 小学校	男	28.6	16.4%
	女	36.7	
	計	65.3	

ロと答えた人はいつごろからそうなったか

項	目	人数	(%)
(3) 高等学校	男	29.6	31.3%
	女	26.8	
	計	56.4	
(2) 中学校	男	42.2	31.3%
	女	26.2	
	計	68.4	
(1) 小学校	男	26.8	31.3%
	女	26.3	
	計	53.1	

ロと答えた人に感じなくなった理由を自由記述で尋ねた。次はその分類結果である。

言語環境におけるきっかけ	人数	割合
・役員をしてから	21	24%
・司会をしてから	4	
・自然になった	6	
・覚悟を決めるから	1	1.2%
・自然になった	6	
・覚悟を決めるから	1	

計四四人	・クラブ活動のため	3	・相手をみくびる	1
	・先生が気をつけてくれた	2	・小さいころから	1
計一五人	・友だちとおしゃべり	2	・慣れた	1
	・転校してから	2	・ガキ大将だったから	1
計四四人	・家庭で習慣づけられた	2	・劣等感がなくなつた	1
	・研究発表してから	1	・話すのがすき	1
計一五人	・卒業式の送辞を読んで	1	・生れつき	1
	・学芸会に出てから	1	・成績がよいから	1
計四四人	・本を読まされて	1		
	・周囲の人が良かった	1		

・人前で話すとき、全体的に見て63・2%の人は恐れ、不安、緊張を感じている。(女子のほうがいくぶん多い。)

・イと答えた人も、ロと答えた人も、その時期としては小学校・中学校が圧倒的に多い。

・イと答えた人は「人前で話した経験があまりない」という理由が多く、閉ざされた言語環境におかれているのに比べ、ロと答えた人は、そのきっかけを、開かれた言語環境においているのが多い。

(7) 話し合いの場は

項目	イと答えた人(口と答えた人に)話し合いの場がある		ロと答えた人(口と答えた人に)話し合いの場があまりない	
	人数	割合(%)	人数	割合(%)
・友人と(旧友との集まり、教室で、昼休み、下校時等)	32	66.7	37	77.7
・家庭で	38	80.0	48	100.0
・クラブで	24	50.0	24	50.0
・クラスで	48	100.0	48	100.0
・学校で	8	16.7	8	16.7
・委員会	8	16.7	8	16.7
・校外活動で	6	12.5	6	12.5
・生徒会	2	4.2	2	4.2
・知り合いの目上の人	1	2.1	1	2.1
計	32	66.7	48	100.0
		3.3%		2.3%

イと答えた人にどのような場なのかを自由記述で尋ねた。次はその分類結果である。

・ 嫌いな人がいなければどこでも	1
・ 近所	1

・ 話し合いの場を持たない人がかなり多い。男子の方がいくぶん閉鎖的な態度が強いが、全体的にみると話し合いの場をほしがっている。

・ ク話し合い々々を、生活の中で話し合い（会話形態）と、討議など目的を持った話し合い（専門形態）との二つのタイプに分けて分類結果を考えると、友人、家庭、クラブ、学校などが多い。つまり生活の中で話し合いが多いようである。

(8) クラスの話し合いの様子を九項目にわたり調査したが、紙面の都合上結果だけ記すと次のとおりである。

- ・ 発言者はかたよって、積極的に発言する人は少ない。
- ・ 人の意見はよく聞いて発言するようである。
- ・ 全体的に考えると、クラスにより差はあるであろうが、クラスの話し合いはもりあがりのあるものとはいえない。

(9) イ授業中方言を

項	目		計	無効 1.2%
	男	女		
a 使う	13.5	5.6	10.4	1.2%
b 時々でてくる	54.9	47.8	52.0	
c 使わない	30.9	44.8	36.4	

(9) ロ友だちどうして方言を

項	目		計	無効 1.6%
	男	女		
a 使う	51.2	43.0	47.9	1.6%
b 時々でてくる	36.5	45.8	40.1	
c 使わない	12.3	7.5	10.4	

・ 授業中は方言を使わないようにという意識がみられる。友だちどうしのばあいは、全体的には使うという傾向が強い。しかし、女子は男子にくらべて使わないという意識が少し強いようである。

(10) 方言を使うことに対してどう思うかを、自由記述で尋ねた。

次はその分類結果である。(代表的なものだけ記し、残りはその他としてまとめた。)

肯定的なもの

親近感がある	20
窮屈でなくてよい	8
自然だ	4
郷土のことはだからよい	2
いいと思う	15
別に悪いとは思わない	35
その他	16
計一〇〇人	

(男女共)

条件つき肯定のもの

(人数)

時と場に応じて	19
職場、授業、公共の場などでは使わない方がよい	9
友だちどうしならよい	13
先生と生徒とは区別して使う	11
人前では標準語を使う	7
目上、他人は慎しむべきだ	5
誰が聞いてもわかるようならよい	5
なるべく標準語がよい	4
恥ずかしがらずに使えばよい	3
下品なのは使わないように	2
その他	10
計八八人	

(男女共)

否定的なもの

(人数)

感じがよくない	3
あまりよいとは思わない	3
直したい。使わないようにしたい	7
その他	13
計二六人	

(男女共)

肯定的なものは、方言のよさを認識して、積極的に方言を認め  
ているようである。

条件付き肯定のものには相手と場所とを考えようとする意識が  
みられる。

否定的なものには、方言を感じがよくないとしているものがあ  
り、標準語に直していこうとする意識がみられる。

全体的に見ると肯定的であり、方言を使うときの心構えはでき  
ているように思われる。

(H) 中学校以来習ってきた文法は、話しことばの中で

項	目		計
	男	女	
イ 役立っている	8.6	14.0	10.8
ロ 役立っていない	25.3	16.7	21.9
ハ 役立っているかどうかわからない	52.5	41.6	47.1
	無効		4.5%

イと答えた人にどのような点が役立っているかを自由記述で  
尋ねた。次はその分類結果である。

敬語	副詞及び形容詞	助詞	接続詞	倒置法	主述関係
14	1	3	1	1	1

(人数)



述部にあたる部分の正しい使い方	1
話す内容の順序	1

文法のまちがいの訂正	1
意味がよく通ずる	1

計二六人

・自分たちの話しことばに文法が役立っているという自覚がほとんど見られない。  
 ・役立っていると答えている人の半数は、敬語をあげているようである。

(ロ)イ 先生と話すとき敬語を

項	目	男	女	計
a 使う		75.3	78.5	76.6
b 時々使う		20.6	18.7	20.4
c 使わない		0.6	1.9	1.1
	無効 (%)	1.9%		

(ロ)ロ 友だちどうして話すとき敬語を

項	目	男	女	計
a 使う		1.2	1.9	1.5
b 時々使う		37.1	34.3	39.8
c 使わない		60.5	63.8	63.9
	無効 (%)	1.1%		

・先生に対しては敬語を使っている。友だちには使わない人が多い

・ bに答えたものは、先生に対しても、友だちに対しても、その親密度によって使い分けているようである。  
 3、まとめ

調査の結果と考察をまとめてみると、次のようになる。  
 ・全体的に友だちどうして話すことは好きである。

・友だちどうして話すのが嫌いな生徒は、ひとりになりたいといった排他的な理由が多く、このようになる時期は自我意識が強くなる時期と平行している。

・友だちどうして話す時は相手の感情を大切にしようとする相手意識が強い。それに対して人前で話すときには相手にわかってもらおうとするコミュニケーション意識のほうが強くなる。  
 ・しかし、友だちどうして話すときも、人前で話すときも、それぞれ約三分の一の生徒は何も心がけていない。このことは見のがすことができない問題だと思われる。

・話しの場合、公的な場(大きな集団)から私的な場(小さな集団)へと移るとき、積極的な人が、消極的になることはほとんどないが、消極的だった人は少しづつ積極的になっていく傾向がみられる。しかしどちらの場においても、「発言したいとは思わない」という人が三分の一もいるということは注目すべきであろう。

・この「発言したいとは思わない」人は、一応会への参加態度がみられないと解釈していいと思う。これは生徒自身に原因があるものと、話し合いのあり方そのものに原因があるものとが考えられる。(話し合いの空洞化、独占化、教師の言動への反感、その他)クラスでの話し合いは、あまりもありあがないもので、クラスにおける話し合いのあり方を検討して見る必要がある。

話す前に恐れ、不安、緊張を感じる生徒も、感じない生徒もそのようになつた時期としては、小学校、中学校がほとんどであることは注目すべきことであろう。小学校、中学校という言語形成期を、閉ざされた言語環境で過ごすか開かれた言語環境で過ごすかは、話す前に、恐れ、不安、緊張を感じるか否かということに大きく影響してることがわかる。つまり、言語形成期は、ことばの面からばかりでなく、話すときの意識の面からも重要な時期であると思われる。

話し合いの場としては、友だちどうし、家庭、クラブなどが多く、生活の中での話し合いが多いようである。この生活の中での話し合いというものが、単なるおしゃべりに終ることなく、話し合いの中で自分の話す態度を見つめて、いろいろな面で互いに触発されつつ、話し合いの楽しさ、むつかしさなどを学んではしい。方言については、友達どうしのはあい使うという傾向が強い。しかし授業中は方言を使うまいとする意識が見られる。全体的には方言を肯定しており、場所、相手を考えて使いわけるといふ傾向がみられる。

文法については、自分たちの話しことばに文法が役立っているという自覚がほとんど見られず、文法が生活と結びついていることを認識させるような文法学習が望まれる。

### 三、話すことの実態

#### 1 研究の方法

##### a 方法

高校生の会話をテープに採録する。あわせて身ぶり言語や表情などにも注意する。採録された会話をそのまま文字化し、問題点など

書き込んで完全資料を作製する。問題点を整理し、分析、考察をすすめる。

#### b 対象と期日

広島市内 観音高等学校 二年生男女各四名

昭和四十年十月十七日十七時三十分～二十時三十分 話し合いの

テーマ「友情と恋愛」

#### 2 文字化の資料と考察

「友情と恋愛」の話し合いのうち、自分を全部出きつたら、友情は成り立つか、の話題のあたりから、一部を掲げる。なおTは司会を示し、この場合は考察の対象から省く。

#### E

(友だちはひとりいる。全部何でも言います。)

#### T

はつきり言つて隠すようなものがない、という場合だね。

#### F

それでもあの「まあ〇〇君が今、友だちがいると言つたで

#### G

すがねえ。友だちというのは、こゝろのことば、どれだけの定義かわから

#### H

ん、わからんですけど、(要意)言える仲の友だちというのは、何か相手が悩

#### I

みをうちあけ、うちあける場合にね、それを真剣に考える、それ以

#### J

上に、自分を犠牲にしましてね、そのために尽してやる、これは理

#### K

想主義もあるかもしれないけどね、そういうもの、だから、(たとへば)ほく

#### L

は、友だちもないし、友情も、僕だけの定義かわからないしね。

#### M

でも、(要意)ある程度の犠牲まで、犠牲はしかたないんじゃないで

#### N

すか。どういふか、その友情を自分でどうしてもね、(要意)続けたいと思

っている場合です。だからまあ、こういう人間だけ自分の  
口は押して定まらずに、(要点)あ、友だちとしておきたいと思えば、やっぱり、  
その、ある程度までの犠牲はその、(要点)そういったその男のためにや  
ってやらんといけんのじゃないんですか。

T え、まあね。尺度としては、その犠牲になっているというこ  
とが、どれほどその人にとって苦痛かということだ。

G そうですね。

T ね。だから、本当の友情であれば、案外そういう犠牲という  
のがかえって嬉しくて苦痛にならんかもしれませぬ。

このような文字化の資料は、西洋紙にプリントして二二枚とな  
った。これらの中より注目すべき事項について以下のようにまとめ  
た。

a 一発言の構成について

一発言における話の組み立てはどのようになっているか、という  
ことを、材料の配列、すなわち「要点」と「条件文、説明文」に視  
点をおいて分析した。要点は、話し手の意見、最も話したいことと  
あり、本論、結論的なものである。接続詞、副詞などに導かれる場  
合が多い。条件文説明文は、要点に対する条件設定の文や説明の文  
であり、言い出しのことは「うん、ええ、たしかに」などに導かれ  
る序文的な相手確認の文である。

なお、とりあつかった発言は七五であり、単なる合いづち、返事  
は除いた。

話の組み立ての分類

(1) 要点冒頭発言型 三五例(四七%)

1、要点だけの発言……………(二〇例)

2、要点+条件文、説明文……………(一五例)

○なりたつとは思いますが、(要点)でもむづかしいと思います。(条件文) (D)

○でも友情を考える場合、(要点)そういうこともありうるんじゃないで  
すか。(説明文) (G)

要点を冒頭に出す発言のしかたである。簡略な発言型なので聞き  
手にわかりやすい。しかし、要点のみの発言では説得力が弱いとも  
言える。

この発言型のうち、言い出しのことはを持つものは七例である。  
持たない場合、唐突に感じる場合も多い。

(2) 要点末尾発言型 一八例(二四%)

1、条件文、説明文+要点……………

2、条件文、説明文+要点+要点

○いやね、(条件文)そりゃね、(説明文)あの疑問とかそういう風な私たちのあの1

あの1私たちが隠していると思っていること、(要感)隠しているって

ことは感じるんですよ。あることが、(要感)でもね、それを私たち

が聞いてどうなるっていうんです。だから、(要感)あのう疑問があつ

てどうにもその人の態度に現われてね私たちにね影響を与える

場合は、(要感)こういうことがあるんですけど、どうですかってふう

に聞くんですよ。

(B)



ああ、う、結婚して、それから生活を……。

そのう、そのう、ゆう、友だちどうして比べたりするでしょ。

えーと、えーとね。私もね、またね、なりたつと思えますけど。

えと、えと、その愛憎の場合は、考え方、考え方がもう……

なんか、なんか、やはり競争心みたいななんかがあるんじゃないか。

なんていうんか、なんいですか。

どういうか、女子の言う、どういうか、友情って言ったら、

どういうんか、なんか、どうゆうんか、昔から男子の人の友情

いうのね、あのどういがかすごく重んじられるん  
ね。

これらのことは、思考が明確になっていない場合、または、的確な表現が見つからない場合に現われる。いわゆる「ことばにまつま」ということがこのような場合であろう。また、これらのことばによって、自論の強調をやわらげようとしたり、ことばにまつまのためにおこる沈黙をさげようとしたりする役割も果たしている。

こう、あ、ゆうのが、こう入り込んで

やっぱり、やっぱり、異性間だったら、別のちがった感情

やはり、をうける。

やっぱし

まあ、いちおうね、まあ、なりたないとは思ってますけどね。  
ちよっと、その方がちよっと、はっきりわたしわかんないんですけ

ど。

間投詞であるが、連用修飾のことばとしての機能も果たしている。

そりゃ、そりゃ、ぼくら、まあ、ぼくの友だちの間ではね。

本来は指示語としての働きをもっていたものであるが、無意識的に類出し、間投詞化されたものととらえられる。

間投詞がこのように類出すということは、発言者の単なるくせとして投げ入れられたものではなく、発言者の心理作用の現われとしてとらえるなら、そこに発言者の発言態度、話し合いへの参加態度、表現に対する彼らなりの工夫など、発言者のさまざまな意識の流れをくむことができると思う。

(2) 文末詞「よ・ね」について

○思うんですよ、ね。

○私はね、一応はね

話しことばにおいて最も頻出度の高いものは「ね」である。文末詞として、訴えかけ性をもつものとして見ることもできるが、各話部ごとに「ね」をつけているということは、文末詞としての機能を果たしたものが、やや間投詞化の傾向を示したものではなからうか。

(3) 接続詞としてあらわれたもの

○でも、そう言われてるんじゃないですか。

○だけど、男の人の友情はなんかあのう……

両方とも発語に多く用いられ、その用い方は特定の人にみられる。完結した文をうけて文頭に用いることにより、自己の発言内容の位置づけを知ることができる。だが、論理的な位置づけとしての

用いられ方より、むしろ反発的な反論としてあらわれる場合が多い。

○思うけど、でも、

○思うけど、だけど、

○苦しむと思うけどね。

「けれど」の約語として用いられ、特に女性語として多くみられる。単刀直入的な言い方を避ける遠慮の気持ちから、余韻をひくように話す。前の叙述をうけて逆の叙述にはいるうとするとき、同じような機能をもつ接続詞が用いられていることから、「けど」は機能を明確に意識して使われてはならないようである。

○……………で、両方ともすてたくなかったです。で、その男の子がこまりましてね。

○だったら、あの、ああゆうこと聞かれる。

○席なんか同じですよ、すわっている。だったら、私なんか、

まあ、話せた方です。

○それから、今さっき、そこで

○友情というのか、その軽い知りあいですね。それからまあたいてい進むものだと思いますし、それからまあ、その恋愛があつてね。

話をすすめていくはしわたしのことはとして、不明確な接続関係のままて接続詞が用いられていく。

c、ことばのくりかえしについて

一般に話しことばではくり返しが多く、時としてわずらわしい感じをうけることもある。高校生の話しことばの中のことばのくり返しにみられる問題点を、表現意識に注意しながらとらえていき

い。

(1) ことばのくり返しを次のように分類して、主な例を列挙する。  
くり返すことにより役割を果たしているもの

① 念を押す(強めを含む) 六例

恋愛だったら自分の、どういふか話したなくても相手の行動いふか、態度でなんかわかるようなあんじやないですか。

恋愛いふのは。(C)

② 具体的説明

三例

……恋というのはね、自分が与えると相手から帰ってくることで、ギヴ・アンド・テイクでそのテイクを望むものなんです。(F)

③ 意見がまとまってくる(文章の観点から) 三例

……(友情は成立すると思うが)……………やっぱり香川さんみたいにむずかしい、……あのう香川さんのいうようにむずかしいんではないかと思えます。(A)

④ 表現が的確になっている。一一例

(いづゆる言いなおし……………ことばの観点から)

だけど女子の、女子どうしの友情いふのはね、なんかやはりねたみとか嫉妬とかああいうのがこう入りこんで、どういふか女性の持つ、持った、どういふのかね、生まれつき持っている、なんかあれみたいで……(C)

これらは明確に分類しきれるものではなく相互に関連しあっている。④よりは③がわずかに段階がすすみ、さらに①や②は聞き手へよりよく理解してもらおうとする意識が強くなる。話し手は意識し

てくり返し言いなおしを行なっている。これはよりの確な表現を求めていることの現われであり、話しながら考えていることの現われである。話しことばにおける特色であるともいえよう。

だが、話す内容を考え、まとめて話すということの不完全なためにおこる現象とみられる場合も多い。

(2) すすんでくり返しているが、かえってわずらわしいもの

○ ○○さんの言うように、なにか、どういうんか、そこにはちよつとむずかしい問題もあるのではないかと思ひます。(C)  
○ ……やっぱりある程度までの犠牲は、その、そういった、そのう、男のためにやってやらんといけんのじゃないですか。

不用意に口をついて出てくるくり返しである。この話し合いでは三例みられた。(G)

(3) 単なる言いなおしで前後に影響のないもの 三例

○ あの、苦勞した末につかんだものか、それがもう一生つなぐんじゃないかと思ひます。(C)

以上、一三二例の発言の中より主な例をあげた。くり返しの多い発言はだいたい発言者が一定してくる。全体的に平均して二二%を占めている。

文章の観点よりすれば、くり返しはいわゆる主部のある部分(糸

件文、例示などを含む)に属するものが多い。

### 主部 二三例

述部(はつきりした言い切り、意見の出る部分) 一一例  
その他両者にまたがるもの 九八例

質問への答えだけとか説明のない意見など短かい発言の場合より、引用、例示、経験を述べたりする長い発言の場合に、くり返しが多くみられる。特に説明的に話を展開していく発言者や考えのまとまらぬままに話す発言者にこの傾向が強い。

話しことばの特質を、文成文の順序が書きことばに比べ正常でないこと、終助詞、間投助詞、感動詞の指示語の多いこと、格助詞の脱落などとしてとらえ、これをふまえてくり返しを検討すると、くり返しにおける表現意識は、聞き手の理解を期待していることと、話しながら考えをまとめる確なことを見出そうとしていることに見られる。

### 3 まとめ

高校生の話しことばにおいて以上見てきたところでは、直接には発言内容に意味を与えていない間投詞の頻出やくり返し、言いなおし表現の頻出するところにまず注目すべきだと思う。

これらが現われるところでは表現しようと思つていふことをよりの確に、わかりやすく表現しようとする彼らの態度がみられる。考へて話し、ことばを求めながら話すこと自体は意義の深いことであるが、聞き手にとっては、それがあまりにも多く出てくることはわずらわしく、話し手の意図をうまくとらえられない可能性も出てくる。また、これらの頻出は、表現内容があらかじめ的確に把握され

ていなく、用いることばを徹底的に見つめることのできていないときにおこり、無自覚的、不用意な表現となる。したがってその表現の前後において文の乱れが認められ、論理的に話しをすすめる態度が欠けている。

一方、「どういうんか」「なんか」の現われる背後とか、くり返し、言いなおしの表現、「……じゃないですか」というような問いの形でその表現の態度には、自己の主張をやわらげて表現しようとする心の動きがあるとともに、その内部には常に「このように言っているのだろうか」という不安がある。不安は表現しようと思う内容を見つめるところに生じるものと思う。不安が不安のまま放置されず、表現内容の正当性に対して正面からとりくみ、徹底して見つめる態度となることが望まれる。

さらに表現内容（主張内容）を話し合いの場において見つめる態度は、発言者によりはっきりと異なっている。発言態度は、話題を積極的に着実に展開していくもの、人の意見に対して真正面からとりくみ主張する発言、意見の一部をとらえて反発的に反論したり、一部に刺激されておしゃべり口調でする発言と、明確に区別されう。話す内容をつめ正当性を検討していく態度があるか、ということをし、くり返しや頻出話との関連で、また発言の組み立ての上から明らかにすることができるかもしれない。

「話すことの事態」より高校における言語教育に示唆するものを掲げるとすれば、次のようなものが考えられると思う。

(1) 高校生がことばをさがすとき、最も確なことを見出させることの必要性。

(2) 自分の話すことば、表現を自覚させることの必要性。

(3) 話し場における話しの内容について考える態度を身につけることの必要性。

#### 四 おわりに

高校生が話すことに対して持っている意識、実際に話すときあらわれるさまざまな問題を見てきたわたしたちは、ここで、表現力をのばすための言語教育のあり方について考えねばならない。

しかし、わたくしたちにはまだできない。「話すことに対する意識」の研究のとりくみは、ほんの一步をふみ出したばかりであり、このグループで実施したアンケート、そしてそれについての考察も、きわめて初期の段階での研究であり、これからのとりくみの一つの方向を示したにすぎない。

一方、「話すことの表現の事態」も、その対象が限られた高校二年生数名による話し合いの場だけであり、私たちのとりくみは、本当に表面的な、注目されることから、私たちなりに整理しただけである。アンケートの意識の面でもりあげたことに即して、対話独話について実際に表現されたものを検討することも残されており、意識の面との有機的な連関のもとに研究を進めていくことが必要であると考えている。

(本学学生)